特別支援教育からの発信！
仲間関係によって学びを深める「協同学習」の成果と展望（２）

企画者　中村　晋（筑波大学附属大塚特別支援学校）
司会者　中村　晋（筑波大学附属大塚特別支援学校）
話題提供者　川越正仁（鹿児島大学教育学部附属特別支援学校）
上仮屋祐介（鹿児島大学教育学部附属特別支援学校）
佐藤義竹（筑波大学附属大塚特別支援学校）
漆畑千帆（千葉県立市川特別支援学校）
指定討論者　米田宏樹（筑波大学人間系）

KEY WORDS: 協同学習　仲間関係　多様な評価機会

【企画趣旨】

次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28 年 12 月 21 日）では、子供の学びの質を高めていくために「主体的・対話的で深い学び（いわゆる「アクティブ・ラーニングの視点」）」の実現に向けて、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化していくことを明確に位置づけた。

これまで知的障害教育においては、子供たちが主体的に社会参加できる力の育成を目指し、多様な学習経験の中で、より主体的に活動参加できる学習の場を提供してきた。子供の学びを支える学習の機会は多様であり、小集団の仲間で目標を共有し、互いに支え合いながら目標を達成したり、評価し合ったりしながら学びを深める協同学習もその一つである。

そこで、本シンポジウムでは，３つの話題提供を通して、協同学習を促進するための有効な手だてについて整理し、知的障害児教育における協同学習の可能性について議論したい。

【話題提供１】「ペア学習による課題解決の実践」
川越・上仮屋（鹿児島大学教育学部附属特別支援学校）

本校では，学校教育目標等を基に本校の児童生徒に育てたい資質・能力を整理し，それを育む授業づくりに努めている。その際，各教科等における知識・技能のみならず，主体性や思考力・判断力・表現力，他者との人間関係を育むためには，児童生徒がどのような学習活動を通して学ぶかということが重要であり，授業づくりの視点の一つに「児童生徒が互いに協力・協働（協同）する活動の設定」を挙げている。ここでは，上述した視点を踏まえて授業づくりを行った高等部の数学科の実践を報告する。年間を通して様々な学習課題に生徒たちがペア等で取り組む機会を積極的に設定した。ペアの設定，学習課題や課題解決に向けた役割及び手順の示し方，教材教具の提示の仕方などを工夫することで，学習課題をペアの友達と確認しながら活動する姿や自分が気付いたことをペアの友達に伝える姿，取組の結果をペアの友達と確認する姿，自分たちの取組について協力して発表する姿などが見られるようになった。

【話題提供２】「協同学習を通した国際理解教育の実践②」
佐藤義竹（筑波大学附属大塚特別支援学校）

本校中学部ではこれまでの学習成果を基に、生活単元学習（学部合同）の授業で国際理解教育に関する学習を行った。単元は年間全６期で構成し、５期までは世界５大陸を題材に各テーマ（音楽、食べ物、鉄道、生き物、物語の５テーマ）から一人一人が興味関心のあるものを選択し、調べ学習や体験的学習を通して興味関心を深めてきた。そして６期では、自他の興味関心の違いに気づくことや興味関心を拡げることに焦点を当てて学習を行った。これまで多様なテーマを選択して学習してきた生徒たちが、主体的に授業に参加し、仲間関係を深めながら学習できるよう「協同学習」（本校研究紀要 59 集）の要素を取り入れた。３～４人のチームで学習する際に、チーム全体と一人一人それぞれに対する手だてや役割設に配慮することで、互いに協力して課題解決を図る姿が見られるようになった。本話題提供では、本単元の６期の実践のおける手だて等について整理し、協同学習を進める方法について議論を深めたい。

【話題提供３】「音楽～学部ダンスをつくろう～」
漆畑千帆（千葉県立市川特別支援学校）

男子生徒Ａさん(高等部 2 年)は、音楽（特に歌唱）に苦手意識を持っており、１年次は音楽の日に欠席することが多かった。２年次では、「上手に歌う」「上手に踊る」というよりも、仲間と歌詞やダンスの振り付けを考えたり、曲を選択したりといった「協同学習の要素」（大塚特別支援学校研究紀要 60 集）を盛り込んだ授業実践を行い、仲間と一緒にアイディアを出し合い、役割を決めながら主体的な参加を促すことに焦点を当てた。「学部ダンスをつくろう」では、歌のパートごとにグループを分け、自分たちでダンスの振り付けを考える実践を行った。ダンスは苦手だが知識が豊富なＡさんは「〇〇はどう？」など自分から意見をだし、ダンスの振りが決まると一生懸命に練習に取り組み、発表では恥ずかしながらも仲間と一緒にダンスを表現することができた。本話題提供では、事例を基に実践の紹介をしながら、「協同学習」を取り入れた教科的学習の目標の設定の仕方や振り返りの設定について議論を深めたい。

【指定討論】

米田宏樹（筑波大学人間系）：それぞれの児童生徒の状態に応じて、取り組む学習課題・活動が個別化され、一連の活動のうちの一部を各児童生徒が分担して行うような場合があるが、このような個々別々の活動では、児童生徒が相互に活動結果を共有し比較し評価しあうことは困難である。それぞれの児童生徒に必要な配慮や支援・課題の難易度を調整して、同じ学習活動に従事できるようにすることが重要である。また、行動的理解を重視する観点から、一連の行動を各自が遂行し、行動のまとまりとして経験し、理解できる学習活動が望ましい。ペアや集団の協同では、役割が固定化されて学習の機会と効果が限定的なものとならないように、学習集団の意図的・計画的な変更も重要である。

(NAKAMURA Susumu, KAWAGOE Masahito,
KAMIKARIYA Yusuke, SATOU Yoshitake, URUSHIHATA Chiho,
YONEDA Hiroki)